富山城東出丸千歳御殿の平面構成と使われ方について

- 嘉永2年から安政2年まで -

PLAN AND SPACE USAGE OF CHITOSE PALACE OF TOYAMA CASTLE IN 1849-1855

岡田 悟*, 飯淵康一**, 永井康雄***

Satoru OKADA, Kouichi IIBUCHI and Yasuo NAGAI

Chitose palace was built in 1849 at east section of Toyama castle and used as a residence for the former lord of Toyama-Han. It was burned out in 1855.

Through the examination of historical materials, following results were ascertained;

- 1) Chitose palace was composed of the Noh stage, ceremony rooms, lord's family's rooms and retainers' rooms.
- 2) Chitose palace was designed considering family members and taste of the former lord.

Keywords : Palace, Retreat, The Noh stage, Lord's family, Toyama-Castle

御殿、隠居所、能舞台、藩主家族、富山城

1. はじめに

藩政期には、各藩の藩主およびその家族は、江戸にあっては上屋敷に、国許にあってはその城館にそれぞれ居住するのを原則とした。一方、これら以外の藩主家族、即ち隠居後の前藩主や前藩主の正室、側室、子女等の居住の場も同時に必要とされる場合があった。これに対しては、江戸にあっては中屋敷や抱屋敷が利用され^{注1)}、また、国許にあっては御茶屋、御殿が利用されたことが知られている^{注2)}が、具体的な平面構成等を検討した研究^{1)~5)}は少なく、また、武士住宅全体を対象とした研究^{6)~8)}においてもこうした居住に供された住宅はほとんど取り上げられていない。

従来、武士住宅研究上の関心は、近世的な秩序を具現し武士社会そのものが凝縮的に演じられる公的行事空間に注がれ、こうした研究の対象としては、江戸上屋敷や城館の表部分が相応しく、これに対して公的性格の薄い奥部分や、中屋敷、抱屋敷、御殿等における家族の居所については重視されされていなかったと言える。しかしながら、奥部分の方が表部分よりもむしろ広い面積を占める場合も珍しくなく、こうした藩主家族の居住状況を明らかにすることは、藩主層の住宅の全体像を明らかにする上で必要であり、今後この方面の研究の充実が望まれる。

今回対象とする富山城東出丸に設けられた千歳御殿は、幕末の短い時期に存在したものではあったが、隠居後の藩主とその家族の居住状況を知り得る貴重な事例と言え、本稿では文献や絵図から平面構成と使われ方を明らかにし、今後の研究の一助としたい。

2. 千歳御殿の敷地・建物の概要および資料

富山城は寛永17年(1640)に加賀前田家の一族である前田利次が入城して以来明治維新を迎えるまで前田氏の居城であった。10代藩主前田利保は弘化3年(1846)10月に致仕し、嘉永元年(1848)に富山城東出丸に千歳御殿の建設を着手した。利保は翌2年に千歳御殿へ移居したが、この御殿は安政2年(1855)の大火で焼失した⁹⁾。

富山城は本丸、二の丸、三の丸、西の丸、東出丸から構成され、北側は神通川に接していた。城全体の略図を図1に示し、併せて千歳御殿が設けられた東出丸部分の変遷を示した。富山城を描いた絵図は数多く遺されている¹⁰⁾。東出丸部分に関しては、入城直後の時期に当たる正保4年(1647)の「越中国富山古城絵図」(金沢市立玉川図書館蔵)では、外堀が「状に屈曲し、堀の内側(西側)に「薪丸」と書き込まれ、外側(東側)に侍屋敷2敷地が描かれている(図1①)。延宝5年(1677)の「越中国富山城絵図」(富山県立図書館蔵)になると、図1①で「薪丸」とされた郭に「東出丸」と書き込まれ、また、aの箇所が朱色で塗られ「此朱引之所新規堀振申度旨淡路守時分及御願候得共只今其儘差置申致候」^{注3)}と書き込まれている(図1②)。図1①に描かれる外堀の外側に新たに堀を加え、さらにもう1つの郭を造り出す計画であったことが知られる。その後の天明年間(1781~88)以降の絵図では、この堀の工事が完成して図1③のように本丸の東側に2つの廓が東西に並んで配置される形に描かれている。本稿では便宜的に内側(西側)の郭をAと、外側(東側)の郭をBと呼ぶ。

* 共立女子短期大学生活科学科 教授・工博

** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 教授・工博

*** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻
准教授・博士(工学)

Prof., Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Urban Planning and Building Engineering, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Urban Planning and Building Engineering, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

図1 富山城略図と東出丸の変遷

各城絵図でのA郭、B郭への書き込みを見ると、片方に東出丸と書き込まれて他方に何も書き込まれていない例が多い^{註4)}が、天明～安政の「富山城図」（富山県立図書館蔵）ではAに「東之御丸」と、Bに「中之御屋敷」と書き込まれ、さらにBには「嘉永二酉年利保君御住居御造営、名ヲ千歳御殿、安政二卯年再御焼失但し埋御門残」^{註5)}と書き込まれ、B郭に千歳御殿が設けられていたことが知られる。このことは「諸事留」¹⁾ 嘉永2年5月25日条に「来ル廿八日就吉辰、大殿様（＝利保）御城中之御屋敷江被遊御引移候旨被仰出候、且右御屋敷向後称千歳御屋敷与、千歳御殿与相唱候様被仰出候」とあるのに符合する。

安政2年（1855）に千歳御殿が焼失した後、『前田氏家乗』⁹⁾に「暫く三の丸内、利民の居に避けられ後ち其の跡に新築落成して徙移せらる」とあるように、利保は三の丸にあった弟利民の屋敷に一時滞在した後、B郭に再建された屋敷に居住したことが知られる。安政2年の焼失を受けて再建を幕府に願ひ出た図^{註6)}の写しである「越中国富山城絵図面」（富山県立図書館蔵）では、B郭に「東出丸隠居長門守（＝利保）住居向」と書き込まれ、この記述と一致する^{註7)}。この後利保は安政6年（1859）に富山で死去し、それまでの間に移居等の記録が見られないことから、死去まで利保はここに居住したと考えられる。千歳御殿が建てられていた郭は、現在は四周の堀が埋められ市街地となっている。また、千歳御殿の門が市内米田に移築保存されている。

千歳御殿の間取りを描いた絵図として

- I. 「利友公御代御新築御隠居利保公御住居」嘉永2年（1849）
（富山市郷土博物館蔵）
- II. 「千歳御殿図」嘉永2年（1849）（富山県立図書館蔵）
- III. 「千歳御殿大殿様御寝所絵図面」御作事所、亥八月（同上）
- IV. 「千歳御殿御絵図面」丑十二月（同上）
- V. 「千歳御殿図」（同上）

の5点が挙げられる。I～IIIに描かれる内容には以下に述べるような共通性が認められ、特にIとIIは酷似している。Iには「嘉永二酉年八月御引移千歳御殿ト称ス」と、IIには「加永二巳丑年千歳御殿御送答候八月廿九日同月玄頂戴」と記されている。IV、Vには敷地の一部が描かれ、I～IIIに描かれる敷地と同一と判断される。IV、Vの平面には相互に共通する部分が見られ、一方、I～IIIとの間に共通性は認められず、IVの書き込みから、IV、Vは安政2年（1855）

図2 利友公御代御新築御隠居利保公御住居(配置図)

の火災以降を描いた図と判断される^{註8)}。

I、IIには四周の堀を含む敷地全体の形状、敷地内の建物配置状況、建物平面図が描かれており、Iの敷地と建物配置を図2に、平面図を図3にそれぞれ示した。IIIには建物平面の一部が描かれ、これを図4に示した^{註9)}。また、Iには「安井八郎氏蔵」と書き込まれている。

この他に、「千歳御殿図屏風」2双（個人蔵、富山市指定文化財）が遺されている。これには千歳御殿の能舞台、および、それに対面する御覧所の姿が、狩野派の絵師木村立獄によって描かれている。それらの姿より推定される平面はI、IIの平面図に合致している。この屏風やI、IIの図はすでに紹介され、それらに基づく復元屋根伏図、復元立面図等が描かれ、内部装飾について検討が行われている^{12) 13)}が、平面構成等を分析したものはない。

本稿では、利保が隠居後に移居した嘉永2年（1849）から焼失した安政2年（1855）までの千歳御殿を対象に、居住者、平面構成、建物各部の使われ方を中心に検討したい。一方、『越中史料』¹⁴⁾に、千歳御殿の経緯や各部分について聞き書きした史料が遺されているので、まずこの史料を検討し、次いでその内容と上記絵図との対照を行いたい。

3. 『越中史料』に見られる記述の内容

『越中史料』二所収の千歳御殿に関する記述を下に転載した。内容に従って、便宜上、4部分に分けて〔イ〕～〔ニ〕の符合を付し、さらに、量の多い〔ロ〕は〔ロ-1〕～〔ロ-10〕の10部分に分割した。全体の量が多いので、読み易くするため文中に出てくる61の部屋名、棟名等にはアンダーラインを付し、順次番号を付して名称の後

の()内に番号を書き入れ^(註) また、各部分ごとに見出しの形で〔 〕内に内容の要約、もしくは、主要な部屋名等を書き入れ、当該部分で述べられる部屋等の番号を付した。

〔イ〕〔建設から焼失までの経緯〕

千歳御殿は富山舊藩主前田利保公が御蔭居の後江戸から富山へ帰られ、本丸に接續する東の出丸即ち今の櫻木町に地を撰び、嘉永元年工事に着手され翌年竣工、八月に利保公御移住となった。御作事總奉行は二千石取りの家老村隼人で、作事奉行は河村右膳、石黒復麿の兩人。多くの町大工を使った中に、彼の大岩の仁王門を彫った名高い中村乙次なといふ彫刻師もゐたとのことである。材木は四ヶ所の御用山より伐出したる外に、上方其他の各地方からも澤山御取寄せになったさうだ。其工費は今日の金額に換算して約六拾万圓との事で、何分珍しい大工事の上に利保公の御住居であれば大工一同は非常の奮發で、献身的に腕前を競ふたものである。然るに安政二年二月二十九日の大火は富山の町の殆んど全部を焼拂ひ、翌三十日の曉天には惜しや此善盡し美盡したる御殿をも空しく灰燼とは化して仕舞った。

〔ロ-1〕〔門、式台、廣間、御書院(1)~(9)〕

今圖に就て説明を試みに、先づ西側の堀の南端に在るのか埋み御門(1)と稱するのて、其處には番所(2)の設けがある。正面の御式台(3)は御類門又は直参大名の外出入のてきないのて、君公は本伴の場合に之れより御出入なさるが、常には御休憩御式台(4)から御出入りに相成る。御式台(3)を上ると正面の御槍床(5)には御槍十文字御槍御長刀を置いてある。休憩所(6)には三組の御先手廻りが替る替るに御番をしてゐて、御式台(3)の間へ出張するには正面へ一列にならぶのである。御式台(3)左方の頭溜(7)といふのは臨時に何か御慶賀のあるときに乗馬士頭から同じく足輕頭までが是へ溜るので、斯かる場合に君公は御書院(8)へお出になる。諸頭分は溜(7)から廣間(9)へ罷出て御目見をするのだ。君公は臨時御慶賀の場合の外、或は御書院(8)で御勝手手の御用を御聴きになることもある。御書院(8)の天井は極彩色の立派なものであったさうだ。

〔ロ-2〕〔内玄関、入口、番人溜、逢對の間、吟味所(10)~(18)〕御内玄関(10)は御殿に御用ある諸士が常に出入する所で、坊主溜(11)には例の頭を剃って羽織を着た無袴の御坊主が詰め、番人溜(12)には袴羽織の足輕が詰めてゐて、坊主は殿内の御用を勤め足輕は外の御用を勤める。内玄関の北の入口(13)は日常御殿へ勤める諸士などが常に出入する所である。こゝに御次坊主溜(14)とあるは御奥勤めの坊主の室、逢對間(15)は役人が役筋につひて互いに面談をする應接室で、御膳所(16)は来客などのある場合に用ふる所、逢對間(15)の手前に在る吟味所(17)には御次御近習が詰めてゐて金銀に関する調べをする所、筆役などはこゝに居る。之れに相對する御用部屋(18)は吟味所(17)と互ひに關係のある所で、御近習頭は晝夜共詰めてゐる。

〔ロ-3〕〔御台子、御用部屋、廣間(18)~(20)〕

其向ふの御台子(19)、一名御茶の間には大きな爐が切つてあつて君公用の大きな湯釜が掛けてゐる。之れには御近習御次近習等、即ち肩衣のある者又肩衣をかけぬ者も居る所である。御用部屋(18)の前の廣間(20)の上には二階があつて、殿内の諸士の狭箱を置きこゝで衣服などを着替へるための狭箱の裡には上下はもとより火事装束ま

で一通り入れて置かねばならなかつた。此二階の下の廣間(20)は奥勤めの諸士が辨當を喫する所に充てられ、こゝには刀掛けをも備へてある。

〔ロ-4〕〔御客間、御廣間、表御居間(7)(9)(11)(21)~(25)〕

御客間(21)は君公への御来客の間で、先づ頭溜(7)の奥なる御廣間(9)に御待たせた上、やかて表勤めの士が出て之れへ御案内をする。其時御客の刀は案内に立つ士が携へるのであるが、坊主溜(11)の前の御廊下に表と奥とを界する錠口(22)の設けがあつて、此所に於て奥勤めの士が御客の刀を受取り、表勤めの士と交替することゝなつてゐる。それから、表御居間(23)といふのは元朝等御祝儀の折に用ゐられ、君公は其際此所で御膳を召上る。かゝる時家老は二の間(24)、頭以下は三の間(25)で御目見をする。

〔ロ-5〕〔御舞台、楽屋、御覽所、拝見所、御居間(26)~(35)〕

之れから御舞台(26)の方へ移つて先づ鏡の間(27)であるが、こゝには大鏡を備ひ装束をつけ面をかむった姿を之れへ寫して見るのである。之間は舞台と同様の廣さがあつて、役者一同揃ふた上、舞台へ出る前に此間で式の如くに列ぶのだ。楽屋(28)は第一がシテ、第二がワキ、第三が狂言、第四が笛大鼓、第五が小鼓、第六が太鼓、それから舞台裏手の長方形が太鼓干し場(29)である。御装束の間(30)は君公のみが御用ひになるもので、此間の總張付には木村雅經の描いた能楽二百十番の極彩色の繪があつた。舞台(26)正面御覽所(31)の間は、御居間(32)との堺が観音開きになって、室内は天井襖總べて金を用ひられ一名總金の間と云ふ。金光燦爛目も眩むばかりとの事である。それから舞台(26)の中庭は總べて青色の石を敷詰めてあつたさうだ。又舞台(26)に向ふ前は簾、南側の拝見所(33)は諸頭諸役人、其後ろは町年寄十村扶持人等、北側の拝見所(34)は家老若年寄奥勤め諸士光嚴寺大法寺等の陪觀する所、又御覽所(31)の御納戸(35)の前方へは藩士の女子の許可を得て拝見をする場所と定められてある。彼等が拝見に出るときは互に美服を競ひ帯一筋に数十金を棄てたさうだ。

〔ロ-6〕〔入口、御休息御式台、御用達、末女、老女(36)~(48)〕

今度は元へ戻つて、諸人入口(36)とあるのは奥勤め女中、又は呉服屋小間物屋などの出入するに用ひる所で、御休息御式台(4)は君公が常用せられるもの、裁許所(37)に詰めるは足輕で御子様外出のときは御付の士の外に此足輕が付そいて先立をする。此所に御用達(38)とあるは御廣敷付の御用達で、小目付(39)は其れに属する新番御徒歩の勤めるもの、對面所(40)は奥筋の用向で役人が御用達に逢ふ所で、時には女中の親戚が訪ねて来てこゝで話をする。然し斯かる場合には必らず小目付が立會はねばならない。此御台子(41)は君公平常の御用に充てるので、御次御料理人溜(42)は諸士女中等の料理を掌る所、末女(43)と云ふのは老女(44)の監督のもとに種々の勤めをする者で、老女(44)は女中の家老とも云ふべく其權威は中々に盛な者である。老女(44)は兩人あつて共に字の如く年長者のこと故之れに助役たる中老(45)なる者がある。長廊下に沿へる御膳所(46)は君公日常の御膳だてをする所で女中のみで其任に當る。其並びの老女(47)の室は當番を以て互ひに一日宛之れへ出張し女中を指揮する所、御仕立所(48)は差向き必要の分丈けを女中の手で辨ずる所で、君公御召物は富山衣服町の吉川某、平吹町の某といふ二軒へ御命じになつてゐた。

〔ロ-7〕〔御覽所、御納戸、御寢所(31)(35)(49)〕

御覧所(31)の後ろの御納戸(35)は君公の御召物を納めてある所、又御寝所(49)の地盤は高く丘をなして御覧所(31)の二階と相通ずる程であるから、神通川及び向岸の風景を一望のうちに鍾め得べく、即ち正北を望めば神江を隔て、牛島村邊を見るべく、川向の堤上数百間には櫻紅葉を植込みて春秋の観を添へ、東の方は木町濱口から東岩瀬の通船終日帆影を絶えず、遠くは立山剣山其麓の常願寺川まで一目に見渡し、西は呉山で其絶頂には七面宮の堂三重の塔などがあった。又御寝所(49)の欄間は紅白の梅の彫刻で床縁床脇は杣田家の青貝の繪、三海家の埋詰で二階の總欄干は朱塗であった。

〔ロ-8〕〔御寝所、側室居所、御子様(43)(49)～(51)〕

御寝所(49)の北に建つ一棟に六疊八疊四疊の三室より成る説明のない部屋が三ヶ所(50)あるのは君公の休息所で御寵愛を蒙った御妾は三人あった。其名はおみね、おつや、おなをと云ふ。御子様は二人(51)、之れへは末女(43)が晝夜御付してゐる。

〔ロ-9〕〔釣殿、納涼所、茶室(49)(52)～(54)〕

御寝所(49)から北の堀の中央にある釣殿(52)を経て納涼所(53)へ通ずる廊下は、下は石垣にして其間を往来されるようになってゐる。廊下の両側に高窓が付いて鐵網が張ってある。納涼所(53)では月に三度つゝ御歌會を催ふされた。又廊下から東へ分廊が通じて梧桐舎と名づけられた茶室(54)へ往かれて、此茶室の周圍と廊下の左右には青桐を植ゑられ俗に之れを桐の御茶室(54)と謂った。

〔ロ-10〕〔土蔵(53)(55)(56)〕

納涼所(53)の西にある二棟の御土蔵(55)は御子様方の衣服其他を納めてあるもの、又堀の東の十二間の長土蔵(56)は、二階の北六間は御能の御装束、南六間は御書物、下は所道具及能の小道具、活版等を入れてあった。

〔ハ〕〔稻荷社、御金蔵、御土蔵、天満宮(53)(54)(57)～(61)〕

猶圖には示してないが、東の堀の北の橋の此方の詰に古木の櫻を植ゑられ、それから堀の東側一帯に二重に櫻樹を植ゑ列ね、其東には本草綱目の順序によつた数千歩の薬草園があるのだ。薬草園は別に桐の御茶室(54)の前にもあり、納涼所(53)の前には鉢植の植物が並べられ、又堀の北端には森に包まれた稻荷の祠(57)を置かれ、其邊に御金蔵(58)が建つてゐる。又堀の東には螺螄山が在って此上からは富山の市内を瞰下す事ができた。其向ふは即ち御馬場、又堀の南方にも御土蔵(59)が建つてゐて、其東には百種の梅樹を植ゑた壽祿天満宮(60)があるけれども、是等も圖では示していない。此天満宮(60)の額堂には奉納百首詠歌の軸を納めた額を初め種々の額が懸けられ、梅林の中央には別亭(61)があつて爰で毎月歌會を催されたさうである。

〔二〕〔口述者、著者〕

以上、十六才より二十五才まで殿中に仕へて居られた安井八郎翁から聞いた所に依つて其の大略を記したので、若し誤りがあれば予の間違ひである。井上江花

4. 『越中史料』に見られる記述の著者、口述者、図との対応

まず、〔二〕に挙げられる口述者安井八郎は富山藩士で侍候¹⁰⁾にその名が見え、天保4、5年(1833、34)頃の生まれで石高は200石、宣勝とも称したことが知られる¹¹⁾。10代藩主利保の著した歌道の書

他を安井宣勝が江戸末期頃に写した『三語脉その他』(仮題、富山県立図書館蔵)が遺されていること、12代藩主利声の二男声智が安井八郎の嗣子となっていることから、和歌に優れ、それを通じて藩主利保との密接な交流があったと考えられる。『越中史料』の記述に「十六才より二十五才まで殿中に仕へて」いたとあるが、この期間は嘉永2、3年(1849、50)から安政5、6年(1858、59)に当り、利保が千歳御殿に居住していた期間にほぼ一致する。

著者井上江花は明治4年生、昭和4年死去の新聞記者で郷土史発掘に力を尽くした¹⁰⁾。『越中史料』の編纂が明治42年であること、および、安井八郎は『清薫集』(富山県立図書館蔵)を明治29年に著しその時まで存命であったと考えられることを考慮すれば、この記述の信頼性は高い。

〔イ〕に述べられる建設から焼失までの経緯は文献9等の記述に合致する¹²⁾。また、建設工事は藩が担当して行い、材料の調達や彫刻の技法等に贅を尽くした建築であったことが述べられている。

〔ロ〕は各室の使われ方が詳細に述べられている中心部分で、冒頭に「今圖に就て説明を試みんに」とあることから、何らかの図と対照させながら述べたものであったことが知られるが、『越中史料』にはこの図に該当するものは載せられていない。〔ハ〕の冒頭には「猶圖には示してないが」とあり、この部分は図に描かれた範囲以外の内容を述べていると考えられる。

〔ロ〕〔ハ〕の内容をⅠ(図2、3)と比較すると、「今圖に就て説明を試みんに」に続く〔ロ〕の1～56の語のほとんどすべてがⅠの書き込みに見られ、「猶圖には示してないが」に続く〔ハ〕の57～61の語はⅠには見られない。これら1～56の部屋名等に対応する図2、図3内の各部分に(1)(2)(3)…(56)のように書き入れたが、『越中史料』での記載順(1)～(56)が図2、3の書き込みに見られる部屋の並び順に符合し、『越中史料』の中で表現されている部屋相互の前後関係や方位がⅠにほぼ一致する¹³⁾。これに対し、Ⅱには若干の相違点が見られる¹⁴⁾。従つて、安井八郎が口述の際に用いた図はⅠ、あるいは、それに非常に近いものであったと判断される。前に述べたようにⅠには「安井八郎氏蔵」と書き込まれていることも、この判断に合致する。

上記の『越中史料』の〔ロ〕〔ハ〕の内容は、その前の〔イ〕に記される嘉永2年～安政2年の千歳御殿の状況を記していると考えられ、また、〔ロ〕〔ハ〕の内容に合致する絵図Ⅰ、Ⅱには共に嘉永2年と記されている。従つて、絵図Ⅰ、Ⅱは嘉永2年に建設された千歳御殿を描いたものと考えられる¹⁵⁾。

5. 嘉永2年～安政2年の千歳御殿の平面構成と使われ方

5-1 敷地形状

図2を見ると、四周が堀に囲まれる状況、および、方位、規模は図1等の城絵図類に符合する。敷地南西端に西方へ向けた門が描かれ、西隣の郭に通じている他、敷地北方、および、東方へは、堀を越えて廊下で接続された棟が描かれている。この他にも、北方、東方に計3本の橋が描かれている。

5-2 舞台廻り

図3を見ると、建物の軸線が屈曲し全体で「く」の字型となり、中央の凹部分に御舞台(26)が位置し、これを囲む形で御覧所(31)、拝見所(33、34)、御装束間(30)、橋掛り、鏡ノ間(27)、楽屋(28)、

太鼓干し場(29)が設けられている。これらの部分の様子は『越中史料』〔ロ-5〕に詳述されているが、建物全体の中心部分にかなりの面積を占め、御覧所、御装束間、さらには、御舞台前の中庭の石にまで色彩を凝らした意匠を用いたことが記されている。「千歳御殿図屏風」では北側から見た舞台正面が描かれていると判断され、懸魚で飾られた入母屋屋根が描かれている。

利保が舞台を眺めた場所は記されていないが、舞台正面であり、金色の意匠が施されていた御覧所(31)であったと考えられる。この御覧所を含む棟は「千歳御殿図屏風」において入母屋屋根の2階建てで、桁行き8間の規模に描かれるが、これはⅠ(図3)に描かれる階数、規模に符合する。

〔ロ-10〕には「堀の東の十二間の長土蔵(56)」と記されるが、拝見所(33)から東方に、堀を越えて延びる廊下の先に「御土蔵」として一部が描かれる棟がこれに該当しよう。能の御装束や小道具が収納されていたとされるが、利保は能を好んだことが知られ^{註10)}、隠居後にも能を楽しむことに重点を置いて千歳御殿の平面計画を行ったと推測される。以上の舞台廻り空間を図2に $\blacksquare$ で示した。

舞台廻り空間を南側から西側を経て北側へ弓なりに取り囲むように建物が配されている。『越中史料』では、まず南側部分が〔ロ-1〕～〔ロ-4〕に、次いで舞台廻りが〔ロ-5〕に、そして、「今度は元へ戻って」とある〔ロ-6〕以降に北側部分が述べられている。

5-3 門、および、建物への入口

〔ロ-1〕によれば南端部には埋み御門(1)と番所(2)があり、番所は図2および図3の付3に該当しよう。門は番所に接続されているものとその西側との2箇所描かれているが、ここに言う埋み御門(1)がどちらを指すかは明確でない^{註11)}。建物への入口としては御玄関(3)があり、そこから北に向かって、御内玄関(10)、入口(13)が設けられ、さらにその北側には、御休息御式台(4)と入口(36)とが並んで設けられ、いずれも建物全体の南西部分に集中し、埋み御門(1)からこれらに導かれる。以上の門、出入口を図2に示した。

5-4 来客への対応

来客への対応手順は〔ロ-4〕によれば、一旦御廣間(9)に待たせ、次いで御客間(21)へ案内し、ここで対応する。この時、坊主溜(11、図の書き込みでは坊主部屋)の前の御廊下に表と奥とを界する錠口(22)の設けがあって、ここで表勤めの士から奥勤めの士へ受け渡しされると記されている。

5-5 儀式空間

〔ロ-4〕には、最も重要な儀礼行為のひとつに挙げられる元朝等は表御居間(23)で行われるとされ、二の間(24)、三の間(25)の用法も続いて記されている。一方、御書院(8)については〔ロ-1〕に、臨時慶賀時に出席する、あるいは、勝手向きの用を聴くことが記されている。従って、表御居間(23)以下3室が儀礼行為の中心となる空間であり、御書院(8)がそれを補うものであったと判断される。

以上のように、来客、儀式に用いられる諸室は南側部分を占めている。この部分を来客・儀式空間として図2に $\blacksquare$ で示した。〔ロ-1〕で御類門、直参大名用とされる御玄関(3)、および、〔ロ-2〕で御殿に御用ある諸士が常に出入するとある御内玄関(10)がこの部分に設けられていることは、来客、儀式という用途に合致する。

5-6 家臣、従者の詰所、居所

〔ロ-1〕では御玄関(3)近くの御玄関番休息所(6)に御先手廻りが、

また、〔ロ-2〕〔ロ-3〕では、御内玄関(10)から日常御殿へ勤める諸士などが常に出入するとされる入口(13)にかけては坊主溜(11、図の書き込みでは坊主部屋)や御次坊主溜(14)に坊主が、番人(12)に足軽が、吟味所(16)に御次御近習や筆役が、御用部屋(17)に御近習頭が、御臺子(19)に御近習御次近習等がそれぞれ詰めていたことが記されている。逢対間(15)、御膳所(16)も、詰所ではないが家臣の相談等に使われている。御用部屋(18)や廣間(20)^{註12)}では家臣の着替えや弁当についての記述も見られ、千歳御殿に勤める家臣の仕事や生活の様子がうかがえる。ここに記されるのは、玄関番のような表向きの、あるいは、御近習のような利保の近習の家臣である。

ところで、『越中史料』には御次坊主溜(14)に詰めている坊主は「御奥勤め」とあり、また、廣間(20)では「奥勤めの諸士が辨當を喫する」とあり、いずれも「奥勤め」の語が見られる。これは、錠口(22)の箇所を表勤めの士から奥勤めの士へ客が受け渡しされるとされていたことと合致する。武士住宅の構成で全体を表と奥に分けた場合、通常は御次坊主溜(14)や廣間(20)は明らかに表部分に属することから、ここに言う表、奥という区分は、通常の表部分の中での来客に対してのものであると考えられる。

〔ロ-1〕で利保が常用するとされる御休息御式臺(4)と、〔ロ-6〕で奥勤め女中又は呉服屋小間物屋などが出入するとされる入口(36)との周辺の部屋が〔ロ-6〕に記されるが、裁許所(37)に詰める足軽は御子様外出時には先立をするとされ、御用達(38)、小目付(39)は御廣敷付とされ^{註13)}、對面所(40)は奥向きの相談をする所とされている。御台子(41)の語はⅠ(図3)には見出せないが、記述の順から御臺所が該当しよう。「土庭」と書き入れられた部分は土間と考えられる。御次料理人(42)は諸士女中等の料理を扱うとされる。いずれも奥向き、あるいは、利保やその子女の私的な生活に関する内容であり、この点が〔ロ-2〕〔ロ-3〕に記される諸室と異なっている。

その先には、末女(43)、老女(44)、中老(45)等、女中の居所である長局が2棟並び、さらに、利保の日常の御膳だてをする御膳所(46)、女中を指揮する老女(47)、利保の衣服を用意する御仕立所(48)が続き、利保とその家族の私的な生活を支えるための部屋が設けられていた。また、入口(36)から御膳所(46)、御仕立所(48)へ向かう廊下の途中に「御錠口」の書き込みが見られ、同様に奥向きの空間ながら、ここを境に、利保とその家族のより私的な生活に関わる空間が形成されていると見られる。

以上より、家臣、従者の詰所、居所は〔ロ-2〕〔ロ-3〕に記される表向家臣従者詰所と、〔ロ-6〕に記される奥向家臣従者詰所居所とに分けられる。両者をそれぞれ図2に $\blacksquare$ $\square$ で示した。

5-7 利保とその家族の空間

御覧所(31)のある棟の1階、2階に見られる御居間(32)については、〔ロ-5〕で御覧所との関係のみが記されているが、この棟にある御納戸(35)が「君公の御召物を納めてある所」と〔ロ-7〕に記されていることから推して、利保の日常の居間であったと考えられる。

郭内最北端の御寢所(49)については〔ロ-7〕には「二階の總欄干」と2階部分がかったように記されるが、Ⅰ原図にはこの部分に2階の表示は見られない^{註14)}。また、〔ロ-7〕には「地盤は高く」ともあり、この表現はⅠ(図3)で御仕立所(48)前から御寢所(49)入側にかけて階段の表示が見られることに合致し、高い地盤の上に建てられたことを示していると考えられる。ここからの眺望の良さが

『越中史料』に詳しく記されている。

絵図Ⅲ(図4)の標題に見られる「大殿様御寝所」はこの御寝所を指すと考えられ、その平面はⅠと異なっているが、「御寝所」を含む2室構成の座敷を中心とする点が共通し、そこから「空地」を挟んで廊下が2本延びる形もⅠに共通し、同様の機能を果たすものと考えられる。この図に記された「亥」の年は「大殿様」つまり利保が居住した嘉永2年(1849)～安政2年(1855)の期間内では嘉永4年のみが該当し、この時の改築計画図、もしくは、実際に改築された図でなかったかと推測される。

この御寝所(49)のある棟から通路で連結された西側部分⁴²⁰⁾については、〔ロ-8〕に「六畳八畳四畳の三室より成る説明のない部屋が三ヶ所(50)あるのは君公の休息所で御寵愛を蒙ったる御妾は三人あった。其名はおみね、おつや、おなをと云ふ」とある。その西側には2室構成の御子様御居間(51)が2組描かれている。

利保には正室の他に毎木、峰、艶という3名の側室がいて、これらとの間に男子13名女子12名計25名の子供がいた⁹⁾。正室久美は明治21年まで存命であったが、墓所が東京であること、嘉永2年以降の利保の富山での隠居生活に関する記録にその名が見出せないことから、利保の隠居後は江戸に居住したと推測される。おみねは峰に、おつやは艶にそれぞれ該当し、おなをについては明確でない⁴²¹⁾。25名の子供の内、嘉永2年(1849)の建設時に利保と同居する可能性があった子供は七男利声、四女弘、八男利雄、十一男利通、十一女美子の5名である⁴²²⁾が、誰がどのように2組の御子様御居間(51)を用いていたかは明確でない。御子様には「末女が晝夜御付し」とあり、末女や老女の居所(43, 44)のある長局から側室や子女の部屋(50, 51)へ直接達することができる廊下が描かれている。

御寝所(49)から廊下で北に接続されて、堀上に2室構成の御釣殿(52)が描かれる。この北側の堀を越えた位置に御居間、納涼所(53、図の書き込みでは御涼所)を含む棟が廊下で接続され、さらにその西側に〔ロ-10〕に言う「納涼所(53)の西にある二棟の御土蔵(55)」が描かれる。「又廊下から東へ分廊が通じて梧桐舎と名づけられた茶室(54)へ往かれ」とあるように、廊下途中から東方へ分岐した先に茶室(54)が描かれる。

御釣殿(52)、納涼所(53)、茶室(54)へは御寝所(49)のみから行くことができること、〔ロ-9〕に納涼所(53)では歌会が行われていたとあること、また〔ロ-10〕に御土蔵(55)には「御子様方の衣服」を収納したとあること等から推して、利保とその家族の私的な空間であったと考えられる。以上の〔ロ-7〕～〔ロ-9〕を中心に記される家族空間を図2に黒塗りで示した。

6. 結び

『越中史料』の記述と絵図資料Ⅰとを対応させながら検討することにより、千歳御殿での利保とその家族、および、家臣や従者の暮らしぶりや生活と空間との対応等を浮かび上がらせることが可能となった。

千歳御殿は、利保が好んだ能を行う舞台を中心に据え、軸線を屈曲させて舞台廻りを充実させる平面計画がされていたことが知られた。軸線の屈曲は、多くの武士住宅の平面が縦軸と横軸とを基に構成されているのと対照的であり、大胆で劇的な効果を狙ったことが予想されると同時に、限定されていた郭内の敷地に大規模な建物を

納めるための現実的な対応方法であったとも考えられる。また、個人の趣味である能の空間を中心に据えた計画も、儀礼行為の空間を優先した多くの武士住宅とは対照的である。

舞台廻り以外の部分では、南から北に向かって、来客・儀式空間、表向家臣従者詰所、奥向家臣従者詰所居所、家族空間の順に各部分が構成されたことが知られた。これらの各要素は通常の大名屋敷等にも見られ、中庭、錠口等によって区分される点も共通する。しかし、通常は儀礼行為の空間に続く形で主人公の御居間、御寝所が設けられるが、千歳御殿では両者は舞台廻り空間によって分離され、また、通常は御鈴廊下等によって主人公の御居間、御寝所と奥とが区分されるが、千歳御殿では両者はむしろ近接して設けられ、家族空間として一体化していた。

この家族空間は利保、側室、子供の部屋から構成されていたが、このように居住者の数、性別等を予め想定して計画することは、他の隠居に用いられた住宅^{1)~5)}にも共通して見られた。従来の研究^{6)~8)}等からは、上屋敷や城館は、個々の藩主、家族の事情に左右されることなく、近世的な身分秩序に従って用いることができる平面構成を持っていたことがうかがわれ、隠居用の住宅はこれと大きく異なっている。

嘉永～安政年間、日本全体が幕末動乱期であっただけでなく、富山藩自身も財政悪化、大火、飢饉、宗藩である加賀藩による政治介入等の難題を抱えていた。千歳御殿はこうした情勢から隔絶されたような斬新、豪華な趣味の世界を持つと同時に、利保と家族の生活の場として家族構成等を考慮した計画がされていた。隠居後の藩主とその家族の住宅という範疇において、藩政末期に実現された一つの特徴ある姿を示していると言てよからう。

謝辞 本稿をまとめるに当たり、史料面で富山市郷土博物館、富山県立図書館の協力を得た。付記して謝意を表したい。

注

注1) 宮崎勝美：江戸の土地―大名・幕臣の土地問題、(吉田伸之(編)：日本の近世9 都市の時代、中央公論社、1992、pp.131～133)、高橋康夫ほか(編)：図集日本都市史、東京大学出版会、1993、pp.196～197に、中屋敷は隠居した藩主やその家族、あるいは、世子の居宅として用いられたことが指摘されている。また、文献4、5では江戸の中屋敷、抱屋敷に隠居後の毛利藩主やその家族が居住した例を示した。

注2) 毛利藩について、文献1～3で御茶屋、御殿に隠居後の藩主やその家族が居住した例を示した。また、金沢の竹沢御殿や金谷御殿、福井の御泉水屋敷においてもこうした利用方法が見られる。

注3) 図が描かれた延宝5年(1677)以前で淡路守を名乗った藩主としては、初代の利次(在位期間：寛永16年1639～延宝2年1674)が挙げられる。

注4) 図1②のようにA郭に東出丸とありB郭に書き込みがない絵図として「旧富山城郭之図」(年代不明、富山県立図書館蔵)等が、また、逆にA郭に書き込みがなくB郭に東出丸とある絵図として「越中国富山城焼失之場覚」(天保3年、同蔵)等がある。

注5) 「再御焼失」とあるのは、正徳4年(1714)年に本丸御殿が焼失したことを踏まえてのことと考えられる。正徳4年の焼失後、東出丸に本丸の代わりとなる御殿が建てられ、それが天保2年(1833)に焼失し、翌年に本丸御殿が再建された。正徳～天保の時期にA、Bの郭にどのように建てられていたかは明確でない。

注6) 図に「越中国富山城東出丸隠居長門守住居向、当二月晦日火災之節焼失仕候付、右焼失跡工仮住居取建之事、右絵図面朱引之通補理申度奉願候」と

書き添えられている。また、利保は弘化3年(1846)に「長門守に改称せられ」(文献9)とある。

注7) この図には敷地内に朱引きで長方形が描かれ、これが図の添え書き(注6)に言う「仮住居」建物外郭線を示すと考えられる。

注8) IVには図中に「栄之助殿御居間」「専姫様御居間」の書き込みが見られ、栄之助(前田利篤)は12代藩主利声の長男で安政5年(1858)生まれ、専姫は同じく二女で慶応元年(1865)生まれである(文献17)ことから、両名が誕生後でIVに書かれる丑年としては慶応元年が該当する。

注9) 図2、3は上を北とし、図2には堀を含めてIに描かれる全範囲を示し、主たる棟に接続されない付属屋3棟には便宜的に付1~3の記号を付した。図2に示す5種類の塗り分けは、後述するように、筆者による。図3には主たる棟と付属屋3棟の平面図を示したが、主たる棟についてはスペースの関係で北側の堀外の建物を分割し、南側部分との対応を※-----※で示し、付属屋平面図は右下部分にまとめて配置した。I原図には御覧所(31)、御居間(32)、御納戸(35)を含む棟、納涼所棟(52)、拝見所(33)、20とした部屋の4箇所2階部分が朱書きで1階部分に重ねて描かれているが、図3には御覧所(31)等を含む棟の2階のみを示し、-----で1階との対応関係を示した。原図では1階の「上り口」と2階の階段の表示とが一致せず、また、後述するようにこの棟の姿を描いたと考えられる「千歳御殿図屏風」も総2階の形に描いていることから、梁間方向に2間半ずれて描かれていると判断され、図3では階段位置が一致するように補正して描いた。また、I原図には畳数が和数字で書き入れられている部屋があるが、図3では一部を書き入れて他は省略した。図4の縮尺は図3と統一した。臺は台と略記した。

注10) 原文には読点のみが用いられて句点が全く見られないが、本稿では文脈から判断して句点と読点とに分けて表現した。また、部屋名、棟名等では、御休憩御式臺と御休息御式臺(4)、坊主溜と坊主部屋(11)、納涼所と御涼所(53)のように表現に若干の相違が見られても文脈や位置関係から同一のものを指していることが明らかな場合には同一の番号を付した。

注11) 「富山御家中分限帳」(文献15)では安政7年(1860)に「御馬廻組式百石安井八郎二十六」とあり、明治2年(1869)に「式百石安井八郎宣勝三十六」とある。

注12) 文献9では「五月二十八日城東の出丸に新たに殿宇を營築し千歳と號し移住せらる」とあり、『越中史料』の「イ」での記述でも竣工と移住とが分けて記されている。これらとIの書き込みとを考え併せると、5月28日に竣工し8月に移居したと考えられる。また、IIに書き込まれる8月29日はこの絵図を「送答」した日付で「同月」に「玄」という者が「頂戴」した、という意に理解できる。なお、嘉永2年の干支は「巳丑」とは異なる。

注13) 「御寝所(49)から北の堀の中央にある釣殿(52)を経て納涼所(53)へ通ずる」〔ロ-9〕、「納涼所(53)の西にある二棟の御土蔵(55)」〔ロ-10〕等

注14) 〔ロ-9〕に納涼所(53)付近に「廊下から東へ分廊が通じて梧桐舎(54)と名づけられた茶室へ往かれて」とあるが、この茶室に相当するものがIには描かれているがIIには描かれていない、〔ロ-5〕で茶屋(28)が6室あるとされるが、Iで6室が並ぶ茶屋部分がIIでは4室に分割して描かれている等。

注15) 嘉永2年(1849)~安政2年(1855)の期間内に当る嘉永7年の「越中国富山城絵図」(富山県立図書館蔵)には、千歳御殿敷地にI、IIとは異なる建物外郭線が描かれている。しかし、この図の本丸に「本丸住居向」と書き込まれて描かれる建物についても、天保3年(1832)に建てられ(注5)安政5年の地震でも大きな損害を受けず明治時代まで遺され、明治初期の「富山本丸御殿」(富山県立図書館蔵)や明治6年の「新川縣管下富山舊城郭修繕縣廳二模様替之図」(滑川市立博物館蔵)に描かれる複雑な外郭線を持つ本丸建物が建てられていたと考えられるにもかかわらず、これとは異なっており、ほぼ正方形に単純化されて描かれている。従って、この図が二の丸櫓門両側の石垣工事用の屈絵図であることも考え併せると、描かれる建物に対しての信憑性は低く、嘉永7年時点でI、IIのような建物が存在していたと判断して問題ない。

注16) 利保は宝生弥五郎を招いて手ほどきを受け、また、「前田利保公能舞三姿図」(富山県立郷土博物館蔵)が遺されている。

注17) 「埋み御門」の名称は前に示した天明~安政の「富山城図」の書き込みで焼け残ったとされる「埋御門」と一致する。「富山御城外千歳御殿焼失之図」(富山県立図書館蔵)は明治初期に描かれたと推定される略図で、安政2年の火災の焼失範囲を描いているが、これによれば千歳御殿の敷地の南西端と焼失範囲を示す境界線とが接している、図2に示す南西端部分が焼け残った可能性が高い。埋門は石垣や築地塀の間に設けられる門の形式であるが、I、II図や焼失前後の時期の城絵図(注4、注6)からはどちらが該当するかを判断するのは難しい。現在市内に移築保存されている遺構の門は薬医門であり、図2に描かれる2つの門の内、西側のものの柱位置と矛盾しない。

注18) 廣間の書き込みはI、IIの原図には共に見られないが、〔ロ-3〕に「廣間(20)の上には二階があつて」とあることから、図3では2階部分が描かれる(注9)部屋が該当すると判断し、(20)と書き入れた。この場合、『越中史料』での記載順とIでの部屋の並び方が矛盾しない。

注19) Iで「御廣敷」と書き込まれた部屋にはIIでは「御用達」と書き込まれているので、図3ではこの部屋を(38)とした。この箇所に限っては例外的にIIの方がIより『越中史料』の記述と合致している。廣敷は大名屋敷の奥向き、台所向きを指す語であり、この部分に合致する。

注20) 〔ロ-8〕には「御寝所(48)の北に建つ」とあるが西、もしくは南西の誤りであろう。

注21) 毎木の名前については「毎木、後に柵」(文献9)、「柵、後毎木」(文献17)とあり、おなをに相当するものは見出せないが、この3名以外の側室は記録に見出せない。

注22) 子供は早世した者が多く、千歳御殿建設以前に生まれた22名の内、16名は弘化2年(1845)までに死去している。残る6名の内、六男利友は弘化3年(1846)に襲封して11代藩主となっているため、千歳御殿に居住していなかったと考えられる。千歳御殿建設以後は男2名女1名が峰との間に生まれたがいずれも安政2年の焼失前に死去している。可能性のある5名の内、七男利声(実母は毎木)は嘉永6年に12代藩主となり、四女弘(実母は正室)は嘉永5年に大聖寺藩主に嫁している。残る3名の実母は毎木が1名、峰が2名である。

参考文献

- 1) 岡田悟：毛利藩における三田尻御茶屋について、日本建築学会計画系論文報告集第444号、pp.127~137、1993.2
- 2) 岡田悟：萩城下の南苑御茶屋、後の八丁御殿について、日本建築学会計画系論文集第561号、pp.239~247、2002.11
- 3) 岡田悟：藩政期における萩の御殿について、同第574号、pp.177~184、2003.12
- 4) 岡田悟：毛利藩の江戸新橋中屋敷について、同第588号、pp.161~168、2005.2
- 5) 岡田悟：毛利藩の江戸葛飾抱屋敷について、同第591号、pp.161~169、2005.5
- 6) 平井聖：日本の近世住宅、鹿島出版会、1968
- 7) 佐藤巧：近世武士住宅、叢文社、1979
- 8) 藤村泉：武士の住居(日本の美術269)、至文堂、1991
- 9) 前田則邦：前田氏家乗、明治23(復刻版 吉川随筆・前田氏家乗 越中資料集成3、桂書房、1988)
- 10) 高橋重雄：越中の絵図、巧玄出版、1975
- 11) 富山県史 史料編V 近世下、富山県、1994
- 12) 常設展示図録 富山城ものがたり、富山県郷土博物館、2005
- 13) 平井清足、吉田靖、平井聖(監修)：復元体系 日本の城 3 北信越、ぎょうせい、1992(富山城部分の執筆は吉田純一)
- 14) 越中史料、富山県、明治42(復刻版 越中史料、名著出版、1972)
- 15) 高瀬保(編)：富山藩侍帳 越中資料集成1、桂書房、1987
- 16) 富山大百科事典 上、北日本新聞社、1994
- 17) 公爵前田家編輯部：加賀藩史料 編外、昭和8、富山県立図書館蔵

(2007年6月8日原稿受理、2007年8月3日採用決定)